

「イスラエル建国史」

22 パレスチナの解放

ユダヤ・中東研究家 滝川 義人

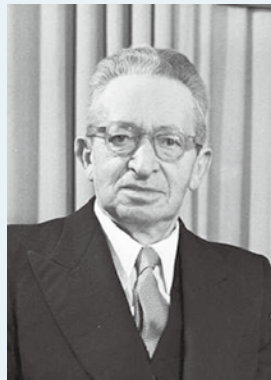
1917年10月31日、パレスチナに「ユダヤ民族のナショナルホーム」を建設することを認めるバルフォア宣言がついにイギリス政府によって閣議決定された。かつてヘルツェルは、国際社会と公法で保証されたユダヤ人国家の再建を夢見たが、その初段階にようやくたどり着いたのである。その後、イギリス軍はベエルシェバ、ガザ、エルサレムを次々に陥落させ、パレスチナ南部を占領するに至る。そこに、1918年にワイツマンを団長とするシオニスト連絡会議の一行が現地入りし、ユダヤ人国家の実現が一気に現実味をおびてきた。

ベングリオンの気概

バルフォア宣言が発表された頃、これからの建国運動をリードする2人の男が、ニューヨークにいた。ベングリオン（当時32歳）とベンツビ（同34歳）である。ベングリオンは初代首相となり、ベンツビはワイツマンの後をついで第2代大統領となるが、2人はトルコによってパレスチナから追放され、苦心惨憺の末アメリカにたどり着いて、青年パイオニア運動（He-Halutz）を組織していた。そこに飛びこんで来たのが、イギリス政府が宣言をだしたというニュースである。



ベングリオン



ベンツビ

ベングリオンは、1917年11月14日付デル・イーディッシュ・ケムプフ（アメリカの労働シオニスト週刊紙）で、バルフォア宣言について次のように論評した。少し長いが、建国運動の基本精神が示されているので、主要個所を紹介する。

「イギリスが我々にイスラエルの地（エレットイスラエル）をとり返してく

れたわけではない。取り返すこともできない。（バルフォア宣言の発表という）大勝利で、喜びに湧いている時にこそ、我々の立場を明確にしておかなければならない…。

たといイギリスがダンからベエルシェバまで支配権を確立し、さあどうぞと言っても、簡単に我々のものとはならない。たとい世界各国がこぞって差し出しても、我々のものとはならない。

大地は、額に汗して働く努力、創造力、建設、開拓を通して初めて人民のものになる。

イギリスは確かに立派なことをしてくれた。政治的実体として我々の存在を認知し、この地に対する我々の権利を認めた。ユダヤ民族は、肉体、精神そして資本の投入によるナショナルホームを建設して、この認知を生きた現実に変えなければならない。そうしてこそ民族の救済は成る」。

第二次世界大戦後、イスラエルの独立とほぼ時を同じくして、アジア・アフリカで沢山の国が独立した。しかし、現在も外国の経済、技術援助に頼りきりの国がいくらかもある。建国の根底に自助努力が必要であることを認識していないのである。ベングリオンは国造りが紙切れ1枚で可能になるとは全く考えていなかった。



滝川 義人
Takigawa Yoshito

1937年長崎県生まれ。早稲田大学第一文学部卒業。イスラエル大使館チーフ・インフォメーション・オフィサー（1968～2004）として勤務。

現在、MEMRI（メモリ、中東報道研究機関）日本代表。ユダヤ、中東研究者。

主要著書：『ユダヤ解説のキーワード』（新潮社）、『ユダヤを知る事典』（東京堂出版）など多数。

エルサレムに対する ユダヤ人志願兵の気持

ユダヤ人部隊の話は北アメリカにも伝わり、第39大隊（アメリカ）として編成されることになった。2700名が応募し、選考に合格した者のうち第一陣180名が、訓練をうけるため1918年2月にカナダへ向かった。応募したベングリオンとベンツビは4月入隊となった。

この第39大隊に入隊したドブ・ヨセフ（1899～1980）は、後にユダヤ機関の幹部となり、1948年の独立戦争時エルサレム軍政官として活動した人物であるが、自分の出身について、大意次のように述べている。

「私の家族は、ロシアのポグロムを逃れてモントリオールへ移住した。19世紀末である。私が4歳の時父が亡くなったので、ユダヤ人としての教育は、ユダヤ教の伝統と戒律を守る祖父が施してくれた。そして母が、『我が子が、私のためにエルサレムの門を開ける』という子守歌を歌って寝かしつけてくれた。母にはもうひ



ドブ・ヨセフ

とつ子守唄があった。神殿の荒れはてた小部屋で、シオンの母がみどりを抱き、皆が戻ってくる夢を歌うという内容で、物心つく頃よく聴いた」(『フェイスフルシティー 1948年のエルサレム包囲戦』)。

ドブ・ヨセフには、ユダヤ史にまつわるいろいろな思い出がある。逾越祭の時「来年はエルサレムで」と祈り、エルサレムの回復を願った記憶。あるいは正統派のどの家でも、室内の壁の継ぎ当てが、エルサレムのためそのままにしてある光景。ドブ・ヨセフにとって、まだ見ぬエルサレムは子どもの頃からなつかしい聖都であった。そしてそれは、ユダヤ軍団に応募した男達に共通する思いであった。

ユダヤ軍団のパレスチナ進出

1918年3月1日、パターソン大佐の率いる第38大隊(ロンドン)がアレクサンドリアに上陸した。ジャボチンスキーがユダヤ軍団の編成をトルンペルドールらと当地で語りあってから、ちょうど3年たった。そのジャボチンスキーは、名誉少尉という妙な肩書の小隊長であった。

第38大隊は、カイロ近郊での訓練を終え、6月5日にパレスチナへ向かった。サラファンド基地(リシオンレツィオン近郊)に宿営したあと布陣したのは、サマリア地方のシュケム(ナブルス)正面である。第39大隊(指揮官エリエゼル・マルゴリン大佐)は8月に進出したが、全部が揃ったのは、終戦に近い頃。さらにパレスチナのユダヤ人で編成された第40大隊(パレス

チナ)は、遂に戦闘を経験しなかった。このユダヤ軍団は、エドワード・チャイトル少将指揮の東側防部隊(二個師団規模)に編入された(ちなみに、休戦後連合軍のパレスチナ駐留兵力3万のうち6分の1は、ユダヤ軍団であった)。

パレスチナの決戦

1918年3月に始まるドイツの春季大攻勢で、連合国側は一時危機的状況に陥ったが、反攻に成功して、8月末時点でドイツの敗北が濃厚になった。連合国軍は、前年4月のアメリカ参戦以来米軍の進出を得て(1918年4月から7月までに67万、年末にはアメリカの在欧兵力は200万になった)、アレンビーのエジプト遠征軍は戦力を増強する機会を得た。

1918年9月19日、アレンビー軍の総攻撃が始まった。ジャボチンスキーの所属する第38大隊は、第39大隊の二個中隊と共に、ウンム・エシャルトの占領確保を命じられた。ヨルダン河谷の渡河点である。渡河点は激戦の末9月23日までに確保され、大隊はヨルダン川東岸に進出した。



ヨルダン河谷 © heatkernel

アレンビー軍は快進撃を続け、アンマン、ダマスカス、アレppoを次々と占領、追い詰められたトルコは和を請い、1918年10月31日に休戦協定が結ばれた。パレスチナ全域が解放され、トランスヨルダン、シリア、

レバノン、イラクもまた多年に及ぶトルコの支配から脱したのである。連合国側がこの旧支配地をどう処理するのか。これが大戦後の重要課題のひとつとなる。それは、国際社会が認めた具体的建国運動の始まりでもあった。

高まるパレスチナ移住熱

パレスチナ解放のニュースで困窮するユダヤ人達は明日にも移住しようとした。

戦後移住が急増することはいはば確実であったので、組織的な対応が必要になった。1917年のワルシャワ・シオニスト会議がその第一歩で、移民の組織化を進めるため、

パレスチナオフィスの設置が決った。パレスチナオフィスは、行動委員会が一度ヤッフォに設けたことがある。1908年のことである。開拓と移民吸収の支援を目的とした。

ワルシャワ会議が決議したオフィスは、世界シオニスト機構(後にユダヤ機関)直轄の本格的な事業体で、ワルシャワ、ウィーン、コンスタンチノーブルにそれぞれ事務所がおかれ、いずれも現地行政機関から公的地位を認められた。一番大きいのがワルシャワのオフィスで、全国に54の支部がつくられた。

世界各地のパレスチナオフィスを統括するのが、ロンドンのシオニスト執行部。1919年4月、ここに中央移住局がつくられた。パレスチナへの移住は、パレスチナの英当局によって吸収力を基準とすることが決められた。1921年に導入された移民法によると、6カ月単位でパレスチナの英当局が移住認可数を決め、それを中央移住局に連絡する。移住局はそれを各国のパレスチナオフィスに配分した。

移民がパレスチナに到着すると、テルアヴィヴ・ヤッフォ、ハイファそしてエルサレムの世界シオニスト機構(後にユダヤ機関)移住局が世話した。



アレンビー大将



ジャボチンスキー



ロンドン市街を行進する第38大隊